

# Re-Inventing the Wheel

## 車輪の再発明プロジェクト ブックリスト

担当：金子 智太郎 | 中川 克志 | 松井 茂 | 城 一裕

2015年5月21日

---

### 『インターメディアの詩学』

著者：ディック・ヒギンズ（著）、岩佐 鉄男（訳）

出版社：国書刊行会

出版年：1988年（原著1984年）

フルスクサスのディック・ヒギンズは、メディアによる表現領域の縦割りを、間（インター）に着目し、図と地を反転させることで、新たな領域再編を促すカタログを編纂した。（松井）

---

### 『宇宙船地球号操縦マニュアル』

著者：バックミンスター・フラウ（著）、芹沢 高志（訳）

出版社：筑摩書房

出版年：2000年（原著1969年）

専門分化した人間にはシステム全体の振る舞いは見えないのだから、物事は包括的に見なければいけない。フラウの全能感は魅力的だ。協同して仕事すれば私たちは世界をより良い場所に変えることができる。（中川）

---

### 『ヴィクトリア朝時代のインターネット』

著者：トム・スタンデージ（著）、服部 桂（訳）

出版社：NTT出版

出版年：2011年（原著1998年）

電信は19世紀に世界の情報の流れを変えた。インターネットは多くの点で電信の後継者だ。電信にはすでにネット犯罪もネット恋愛もあったという。技術の過去を学ぶことの意味を考えるための入門書。（金子）

---

### 『音響メディア史』

著者：谷口 文和・中川 克志・福田 裕大

出版社：ナカニシヤ出版

出版年：2015年

音響メディアの考古学。フォノグラフやグラモフォンといった19世紀後半に登場した音響再生産技術は、どのような歴史的・社会的背景から登場し、どのような経緯で社会にメディアとして受容されたのか。（中川）

---

### 『機械化の文化史 —ものいわぬものの歴史』

著者：S. ギーディオ（著）、榮久庵 祥二（訳）

出版社：鹿島出版会

出版年：1977年（原著1948年）

工業、農業から家事や入浴まで、あらゆる技術が機械化される過程を古代、中世にまでさかのぼってたどった古典的大著。著者は美術史家ヴェルフリンに学んだ建築史家であり、マクルーハンのメディア研究にも影響をあたえた。（金子）

---

### 『聞こえる過去 —音響再生産の文化的起源』

著者：ジョナサン・スターン（著）、中川 克志、金子 智太郎、谷口 文和（訳）

出版社：インスクリプト

出版年：2015年刊行予定（原著2003年）

スターンの関心は技術がいかに社会を変えるのかではなく、社会がいかに技術を育て、普及させるのかにある。だから本書には生まれたばかりのテクノロジーの、現在から見れば異様な姿もさまざまに描かれている。（金子）

---

### 『グラモフォン・フィルム・タイプライター』

著者：フリードリヒ・A. キットラー（著）、石光 泰夫、石光 輝子（訳）

出版社：筑摩書房

出版年：1999年（原著1986年）

すさまじい知識に裏打ちされた膨大な逸話の数々。コンピュータのもたらす新たな文盲への批評（そして、最終章にはNSAによって準備された未来の話）すら書かれている。この本一冊からどれだけの再発明をすることが出来るのだろうか。（城）

---

### 『芸術の設計 —見る／作ることのアプリケーション』

著者：岡崎 乾二郎

出版社：フィルムアート社

出版年：2007年

美術家の岡崎乾二郎は、諸芸術の作品分析（表現研究）を通じて、作品の背後にある設計理論を抽出、歴史性や領域性を自由自在に横断可能にする、アプリケーションのカタログを編纂した。（松井）

---

## 『現代音楽のバサージュ —20・5世紀の音楽』

著者：松平 頼暁

出版社：青土社

出版年：1995年（原著1984年）

作曲家の松平頼暁は、近代の究極として成立した現代音楽を、前衛の方法論として分類することで、自己表現的な作曲家に依存する音楽観を解体し、再編可能なアプリケーションのカタログに編纂した。（松井）

---

## 『手法が』

著者：磯崎 新

出版社：美術出版社

出版年：1979年

建築家の磯崎新は、近代が成立させてきた建築における因習を、「手法」として要素還元することで、歴史的な馴致を解体し、再編可能なアプリケーションのカタログに編纂した。（松井）

---

## 『精神と自然』

著者：グレゴリー・ベイトソン（著）、佐藤 良明（訳）

出版社：新思案社

出版年：2006年（原著1979年）

ベイトソンが偉いのは複数の専門領域にまたがって考え続けたからだ。生物進化のかたちと創造的思考のかたちとの間の類型性を考えることでベイトソンは「精神」を発見した。面白いことはたいてい何かと何かの交差点で起こる。Googleの人事採用担当者もそう言っていた。（中川）

---

## 『生成音楽ワークショップの展覧会』

著者：生成音楽ワークショップ（城 一裕+金子 智太郎）

出版社：—

出版年：2015年

音楽を自動的に生み出すアプリケーションの開発をきっかけに始まった生成音楽ワークショップは、歴史のなかに自動音楽装置を探し、その再現を試みてきた。現在と過去を往復するこのアプローチは、本プロジェクトの原点のひとつ。（金子）

---

## 『西洋画人列伝』

著者：中ザワヒデキ

出版社：NTT出版

出版年：2001年

美術家の中ザワヒデキは、西洋絵画のメチエを、コンピュータによる描画システムの知見に基づいて分析し、方法を前景化した列伝として記述、美術史自体をアプリケーションのカタログに編纂した。（松井）

---

## 『ポール・デマリーニス展 —メディアの考古学』

著者：坂根巖夫（監）

出版社：NTT出版

出版年：1997年

デマリーニスの作品の魅力は、斬新な発明品にも見えるのに、実は一世紀も前の発想が元になっているというような二面性だ。この二面性が私達の時間感覚をくわせ、技術の常識を疑うよう訴えかける。（金子）

---

## 『ドラえもん』

著者：藤子・F・不二雄

出版社：小学館

出版年：1974年

未来の世界からやってきた猫型ロボットは、電話ボックスから現在に対して「もしも」という疑問と欲望を投げかける。私たちは過去を探ることで現在に対して「もしも」を投げかけてみたいのだ。（中川）

---

## 『ニューメディアの言語』

著者：レフ・マノヴィッチ（著）、堀 潤之（訳）

出版社：みすず書房

出版年：2013年（原著2001年）

メディアは、コンピュータを使うだけで何となく新しくなるのではない。ニュー・メディアには、数字による表象、モジュール性、自動化、可変性、トランスコーディングという原則がある。本書は極めて具体的なメディア考古学なのだ。（中川）

---

## 『FABに何が可能か —「つくりながら生きる」21世紀の野生の思考』

著者：田中 浩也（著・編集）、門田 和雄（著・編集）、久保田 晃弘（著）、城 一裕（著）、松井 茂（著）他

出版社：フィルムアート社

出版年：2013年

日本でのファブラボの創成に関わったメンバーを中心に書かれた書籍。本プロジェクトの決意表明(?)がなされているとも言える（8章—FABが芸術を変える・松井、おわりに—今をつくりだすために・城）。当時の各々の状況は既に遠い昔のようにすら思える。（城）

---

『Fab —パーソナルコンピュータからパーソナルファブリケーションへ (Make: Japan Books)』

著者：ニール・ガーシェンフェルド（著）、田中 浩也（監修）、糸川 洋（訳）

出版社：オライリージャパン

出版年：2012年（原著 2005年）

インターネットに繋がれたパーソナルな工作機械を使って、自分の欲しい（必要な）ものを自分たちでつくる。単なる新たな生産手段として矮小化されたデジタル・ファブリケーションとは異なる未来がここには記されている。（城）

---

『フリーソフトウェアと自由な社会 —Richard M. Stallman エッセイ集』

著者：リチャード・M・ストールマン（著）、長尾 高弘（訳）

出版社：アスキー

出版年：2003年

著作権の極北、クリエイティブ・コモンズの原点の一つ。“「コード」によって支配されつつある世界の中で、自由を求める運動を確立したプログラマ” [ローレンス・レッシング、序文] の言葉や歌（フリー・ソフトウェアの歌、10章）を、スノーデン以降のいま、改めて受け止めたい。（城）

---

『メディア考古学 —過去・現在・未来の対話のために』

著者：エルキ・フータモ（著）、太田 純貴（編訳）

出版社：NTT出版

出版年：2015年

これまでのメディア研究をマッピングする「メディア考古学の考古学」から、装置を通して見るという実践の文化史、そして芸術への応用まで、フータモによるメディア考古学の方法をまとめた論文集。（金子）

---

『メディア論 —人間の拡張の諸相』

著者：M・マクルーハン（著）、栗原 裕・河本 仲聖（訳）

出版社：みすず書房

出版年：1987年（原著 1964年）

メディアとメッセージは別物だ。だからひとは個々の映画作品のみならず映画一般に対する愛を語ったりする。マクルーハンにはメディアがその中身とは別の存在であることを指摘し続けた。メディアこそがメッセージなのだ。（中川）

---

『横井軍平ゲーム館 RETURNS —ゲームボーイを生んだ発想力』

著者：横井 軍平、牧野 武文

出版社：フィルムアート社

出版年：2010年（原著 1997年）

何はともあれ「枯れた技術の水平思考」。技術の使い方にひとひねりを加え、コストを掛けずに商品（作品）化する。物量ではなく、ゲリラで挑むその姿勢を私たちは見習わざるをえない。（城）